

1/8 Mon.
holiday

第132回 横浜マチネーシリーズ
横浜みなとみらいホール 14時開演
YOKOHAMA MATINÉE SERIES No.132 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

1/10 Wed.

第669回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No.669 / Suntory Hall 19:00

指揮
Principal Conductor

ピアノ
Piano

コンサートマスター
Concertmaster

ブラームス
BRAHMS

[休憩]
[Intermission]

シューマン
SCHUMANN

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.5
SEBASTIAN WEIGLE

藤田真央 -p.6
MAO FUJITA

長原幸太
KOTA NAGAHARA

ピアノ協奏曲 第2番 変口長調 作品83 [約46分] -p.9
Piano Concerto No. 2 in B flat major, op. 83
I. Allegro non troppo
II. Allegro appassionato
III. Andante
IV. Allegretto grazioso

交響曲 第1番 変口長調 作品38 〈春〉 [約30分] -p.10
Symphony No. 1 in B flat major, op. 38 "Spring"
I. Andante un poco maestoso – Allegro molto vivace
II. Larghetto
III. Scherzo: Molto vivace
IV. Allegro animato e grazioso

1/16 Tue.

第634回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.634 / Suntory Hall 19:00

指揮
Principal Conductor

ヴァイオリン
Violin

コンサートマスター
Concertmaster

ワーグナー
WAGNER

ベートーヴェン
BEETHOVEN

[休憩]
[Intermission]

R. シュトラウス
R. STRAUSS

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.5
SEBASTIAN WEIGLE

ダニエル・ロザコヴィッチ -p.6
DANIEL LOZAKOVICH

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

歌劇〈リエンツィ〉序曲 [約12分] -p.12
"Rienzi" Overture

ヴァイオリン協奏曲 二長調 作品61 [約42分] -p.13
Violin Concerto in D major, op. 61
I. Allegro ma non troppo
II. Larghetto
III. Rondo: Allegro

交響詩〈ツァラトゥストラはかく語りき〉
作品30 [約33分] -p.14

Also sprach Zarathustra, op. 30
I. 導入 – II. 世界の背後を説く人々について –
III. 大いなる憧れについて – IV. 喜びと情熱について –
V. 墓場の歌 – VI. 学問について – VII. 病の癒えつつある者 –
VIII. 舞踏の歌 – IX. 夜をさすらう者の歌

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（創造団体支援））
文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会（1/10）

協力：横浜みなとみらいホール（1/8）

※1/10公演では日本テレビ「読響プレミア」の収録が行われます。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（創造団体支援））
文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会

協賛：株式会社セキド

協力：アフラック生命保険株式会社

1/20 Sat.

第263回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No. 263 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

1/21 Sun.

第263回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No. 263 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Principal Conductor
クラリネット
Clarinet
コンサートマスター
Concertmaster

ニコライ
NICOLAI

ウェーバー
WEBER

[休憩]
[Intermission]

ベートーヴェン
BEETHOVEN

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.5

SEBASTIAN WEIGLE

ダニエル・オッテンザマー -p.7

DANIEL OTTENSAMER

長原幸太

KOTA NAGAHARA

歌劇《ウィンザーの陽気な女房たち》序曲

[約8分] -p.17

“Die lustigen Weiber von Windsor” Overture

クラリネット協奏曲 第2番 変ホ長調 作品74

[約19分] -p.18

Clarinet Concerto No. 2 in E flat major, op. 74

I. Allegro

II. Romanza: Andante

III. Alla polacca

交響曲 第6番 へ長調 作品68 (田園) [約39分] -p.19

Symphony No. 6 in F major, op. 68 “Pastoral”

I. 田舎に着いたときの愉快的気分

II. 小川のほとり

III. 田舎の人たちの楽しい集い

IV. 雷と嵐

V. 牧歌、嵐の後の喜びと感謝

指揮

セバスティアン・ヴァイグレ

(常任指揮者)

SEBASTIAN WEIGLE, Principal Conductor



名匠ヴァイグレが振る 珠玉のドイツ音楽

ドイツ出身の名匠ヴァイグレが、得意のオーストリア・ドイツ音楽で、構築性に富んだ温かな音楽づくりで聴衆を魅了する。

1961年ベルリン生まれ。82年にベルリン国立歌劇場管の首席ホルン奏者となった後、巨匠バレンボイムの勧めで指揮者へ転身。2003年には、ドイツのオペラ雑誌『オーパンヴェルト』の「年間最優秀指揮者」に選ばれ注目を浴びた。04年から09年までリセウ大劇場の音楽総監督を務め、評判を呼んだ。08年から23年夏までフランクフルト歌劇場の音楽総監督を務め、在任期間中に同歌劇場管が『オーパンヴェルト』誌の「年間最優秀オーケストラ」に、同歌劇場が「年間最優秀歌劇場」にたびたび輝くなど、その手腕は高く評価された。

読響には16年8月に初登場し、19年から第10代常任指揮者を務めている。近年もメトロポリタン歌劇場でムソルグスキー〈ボリス・ゴドゥノフ〉を、バイエルン国立歌劇場でR. シュトラウス〈影のない女〉を指揮するなど、世界的な活躍を続ける。23年7月には、フランクフルト歌劇場で音楽総監督としての最後の公演でルディ・シュテファン〈最初の人類〉を振り、大きな話題を呼んだ。これまでに、バイロイト音楽祭、ザルツブルク音楽祭に出演したほか、ウィーン国立歌劇場、ベルリン国立歌劇場、英国ロイヤル・オペラなどに客演。ベルリン放送響、ウィーン響、フランクフルト放送響などの一流楽団とも共演を重ねている。コロナ禍には何度も隔離期間を経て、読響と充実した演奏を繰り広げ、ファンを魅了した。

1/8

横浜マチネー

1/10

名曲

1/16

定期

1/20

土曜マチネー

1/21

日曜マチネー

Maestro

1/8
横浜マチネー

1/10
名曲

Artist



©Dovile Sermokas

ピアノ

藤田真央

MAO FUJITA, Piano

2019年のチャイコフスキー国際コンクールで第2位を受賞し、世界から注目を集める気鋭。1998年東京生まれ。2017年クララ・ハスキル国際コンクール優勝。ルツェルン音楽祭、ヴェルビエ音楽祭など主要な音楽祭へ定期的に出演。23年1月、カーネギー・ホール主催のソロ・リサイタル・デビュー。同年5月、音楽監督リッカルド・シャイー率いるミラノ・スカラ座フィルとの欧州ツアーを成功させ、7月にはウィグモア・ホールにて5日間にわたるモーツァルトのピアノ・ソナタ全曲ツィクルスを開催。エッセンバッハ、ネルソンス、ヤノフスキら指揮者からの信頼も厚い。21年にソニークラシカル・インターナショナルと専属契約を締結し、22年には『モーツァルト：ピアノ・ソナタ全曲集』をリリース。読響とは21年以来、4度目の共演。

1/16
定期

Artist

“恐るべき才能”と注目を浴びる新鋭。2001年ストックホルム生まれ。8歳で協奏曲デビューを飾り、15歳で名門ドイツ・グラモフォンと専属契約を結び、脚光を浴びた。エッセンバッハ、ネルソンス、サロネン、ビシュコフら名匠の指揮で、シカゴ響、ボストン響、ミュンヘン・フィルなど世界の一流楽団と共演し、国際的に活躍。23年1月にシャイー指揮ミラノ・スカラ座フィル、7月にマケラ指揮オスロ・フィルと共演し、絶賛された。各地の音楽祭にもたびたび登場しており、ヴェルビエ音楽祭、エクサン・プロヴァンス音楽祭などに出演。リサイタルも精力的に行っており、24年3月にはアムステルダム・コンサートヘボウ、4月にはカーネギー・ホールでのリサイタル・デビューを予定している。読響初登場。



©Henrik Björlin

ヴァイオリン

ダニエル・ロザコヴィッチ

DANIEL LOZAKOVICH, Violin



©Andrej Grlic

クラリネット

ダニエル・オッテンザマー

DANIEL OTTENSAMER, Clarinet

ウィーンの伝統を受け継ぐ俊英。2009年からウィーン・フィルの首席奏者として活躍している。09年にカール・ニールセン国際コンクールで入賞。ソリストとしてマゼール、ドゥダメル、ルイーザらの指揮でウィーン・フィル、モーツァルテウム管などと共演を重ねてきた。21年にはザルツブルク音楽祭にソリストとしてデビューし、好評を博した。録音も多く、ソロではモーツァルト、フランセ、ニールセンの協奏曲をウィーン・フィルなどとの共演でリリース。22年にS. コンツ（チェロ）、C. トラクスラー（ピアノ）と組み、クラリネット三重奏曲（全27曲）による「The Clarinet Trio Anthology」（7枚組）をデッカから発売し、全12公演のアジア・ツアーを成功させた。読響とは16年以来、2度目の共演。

1/20
土曜マチネー

1/21
日曜マチネー

Artist

ブラームス

ピアノ協奏曲 第2番 変ロ長調 作品83

1/8
横浜マチネー

1/10
名曲

Program Notes

ピアノ協奏曲第2番はヨハネス・ブラームス(1833~97) 壮年期の手になる、ロマン派におけるこのジャンルの最高傑作のひとつに数えられるものである。

1877年から79年までブラームスは夏をオーストリアの保養地ペルチャッハで過ごした。本作はこの地で78年にヴァイオリン・ソナタ第1番、ヴァイオリン協奏曲などと並んで着手されたが、完成は1881年7月となった。78年にも81年にも、ブラームスは本作に取り掛かる前にイタリアを訪れており、とりわけ後者ではシチリアにまで足を延ばして大きな感銘を受けた。その体験は本作のたたずまいにも影響しているだろう。ブラームスは完成後、この曲を自ら独奏者として20もの都市で演奏したが、大曲かつかなりの難曲でもあるため、ピアニストとしての技量も高かったことがうかがえる。

協奏曲は3楽章構成が一般的だが、この曲はスケルツォを加えた4つの楽章からなり、また独奏は技巧を押し出すことよりも、管弦楽と並び立ちながら分厚い響きで音楽を充実させることに重きが置かれている。

第1楽章 アレグロ・ノン・トロppo ホルンの牧歌的な主題をピアノが追いかけて始まり、管弦楽が澁^{はつらつ}刺と反復した後、憂いを帯びた第2主題が現れる。

第2楽章 アレグロ・アパッショナート 情熱的なテーマで始まるスケルツォ楽章。中間部に晴れやかな新主題が現れるが、すぐに冒頭の気分が戻ってくる。

第3楽章 アンダンテ チェロの美しいソロで始まるロマンティックな楽章。ここにイタリア的な優雅さを聞き取ってもいいかもしれない。

第4楽章 アレグレット・グラツィオーソ リズミカルな主題を持った部分、木管のメランコリックな旋律、それと対比的な明るい旋律が組み合わせられた部分が多彩な展開を施されて繰り返される。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1878~81年／初演：1881年11月9日、ブタペスト／演奏時間：約46分

楽器編成／フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

シューマン

交響曲 第1番 変ロ長調 作品38 〈春〉

ブラームスの作曲家としての道を開くのに大いに寄与したのがロベルト・シューマン (1810～56) である。ブラームスはシューマン夫妻と親しくつきあい、シューマンの死後も妻クララと生涯にわたり親交を結んだ。

シューマンが交響曲第1番を作曲したのは、ちょうどそのクララと結婚した時期にあたる。二人の結婚にはシューマンのかつての師でありクララの父親であるフリードリヒ・ヴィークが強く反対し、実現までの道のりは苦難の連続となった。クララを天才ピアニストとして育てたヴィークは、将来性が未知の青年芸術家との交際をあの手この手で妨害し、それでも二人の気持ちが変わらないことを知ると、自らの財産の相続放棄を要求し、クララへの演奏報酬の支払いを拒否した。ここに至ってシューマンは父親の同意なしでの結婚を裁判所に申し立てる。ヴィークはシューマンの品行が下劣だとして告訴するが、1840年1月に告訴は一部を除き棄却、8月には結婚が法的に許可され、二人は晴れて夫婦となるのである。

才能あふれるクララとの愛の成就是シューマンの創作意欲を激しく燃え上がらせた。まず結婚の年には歌曲が量産され、〈リーダークライス〉〈女の愛と生涯〉〈詩人の恋〉といった傑作が生まれる。翌41年には交響曲、管弦楽曲に集中的に取り組み、本作をはじめ交響曲第4番の初稿、後のピアノ協奏曲の第1楽章にあたるものの他に、未完に終わった交響曲のスケッチなども残されている。さらに42年には室内楽曲も集中的に作曲されており、クララとの生活が創作にいかに大きな影響を与えたかを物語っている (のちにシューマンの活躍を認めたヴィークは43年に和解を申し出ている)。こうした事情は本交響曲の作曲にもはっきりと認められ、シューマンは41年1月23日にスケッチを始め、わずか4日間で全体を書き上げてしまった。その翌日からオーケストレーションに取りかかり、2月20日には最初の稿を完成させている。恐るべき速筆ぶりだ。

ところで、シューマンがこの年に交響曲に向かった直接の動機としては、39年のウィーン訪問時にシューベルトの遺稿から八長調交響曲 (〈グレイト〉として知られる) の総譜を発見したことも影響している。シューマンはこの埋もれた傑作の存在をゲヴァントハウス管弦楽団の指揮者だったメンデルスゾーンに知らせ、初演の際

には“ベートーヴェン以降の最も偉大な作品”と言うほど感動した。一般に交響曲創作は19世紀中葉には停滞していたと言われるが、その営みはベートーヴェンからシューベルトを経てシューマンへと受け継がれ、さらにブラームスへと続いていくのである。

本作はアドルフ・ベットガーの詩句にインスピレーションを受けており、自筆譜には各楽章に「春の始まり」「夕べ」「楽しい遊び」「たけなわの春」という標題が添えられていた。

第1楽章 アンダンテ・ウン・ポ・マエストーソ〜アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ トランペットとホルンによる荘重なファンファーレで始まる。このファンファーレはアレグロ部に入ると弦や木管にすぐに現れる快活な第1主題を先取りしている。第2主題は木管楽器による柔和なもの。展開部以降はもっぱら第1主題の要素を中心に進む。

第2楽章 ラルゲット シンプルな旋律が歌われるが、繊細なハーモニーとエレガントな装飾、巧みな楽器法によって刻々と移り変わる変化の相が描き出される。結尾ではトロンボーンが第3楽章の主題を予兆する。

第3楽章 モルト・ヴィヴァーチェ 二つのトリオを持ったスケルツォ楽章。

第4楽章 アレグロ・アニマート・エ・グラツィオーソ ソナタ形式による快活な終楽章で、才気煥発な種々の仕掛けやリズムの遊びが楽しい。特にピアノ曲〈クライスレリアーナ〉終曲の旋律から採られた軽やかなモチーフにユニゾンの上行音型が続く第2主題は印象的だ。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1841年／初演：1841年3月31日、ライプツィヒ／演奏時間：約30分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器 (トライアングル)、弦五部

ワーグナー 歌劇〈リエンツィ〉序曲

リヒャルト・ワーグナー（1813～83）は1839年、ハンザ同盟の港町リガ（現ラトビア）からパリを目指した。借金取りに追われてのことだ。ただし、その手には歌劇〈リエンツィ〉（の第2幕まで）の楽譜が握られていた。花の都で困窮した生活を送る中、オペラの作曲を再開したのが1840年2月。同年10月、その作業の締めくくりとして序曲を書き上げた。

貧困に苛まれながらパリでの成功を目指して創作を進めるワーグナーを支援したのは、ジャコモ・マイアベーアである。〈ユグノー教徒〉でパリ歌劇界の寵児となった作曲家が、新進のオペラ作家を助け、その力作〈リエンツィ〉の初演を実現させた。

このオペラは、ローマの政体をめぐる平民と貴族の争いに、男女・肉親の愛憎劇を折り込んだ悲劇。平民出身の護民官リエンツィの善政、専横、死を描く。最後に完成した序曲は、オペラの登場人物や場面を象徴する音型をふんだんに取り入れ、歌劇のあらましを音楽で語る。特定の事物とモチーフとを結びつける書法は、以後のオペラにつながっていく。

全体はソナタ形式風の運び。民衆の蜂起を促す「信号ラッパ」（第1幕第4場）で幕を開ける。続いて、旋回する装飾音を伴って6度音程で上行する音型が耳を引く。この主題は「リエンツィの祈り」（第5幕第1場）。息長くクレッシェンドした「祈り」が最高潮に達すると、小太鼓の連打がそれを遮る。

再び「信号ラッパ」が鳴り響くと、行進曲風の提示部に入る。この旋律は「リエンツィを歓迎する歌」（第1幕第4場）に基づく。やがて「聖霊の騎士」（第3幕第3場）の主題が現れ、貴族との戦いに備え氣勢をあげる民衆の声がこだまする。

そこに第2幕第3場の「リエンツィ讃歌」が続き、「聖霊の騎士」の主題を伴って展開部に入る。改めて「信号ラッパ」が鳴ると再現部。「リエンツィ讃歌」と「聖霊の騎士」の主題を回想して力強く曲を閉じる。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：オペラ全体は1838～40年、序曲は1840年／初演：1842年10月20日、ドレスデン／演奏時間：約12分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、中太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル）、弦五部

ベートーヴェン ヴァイオリン協奏曲 二長調 作品61

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）は「傑作の森」と呼ばれる創作期のさなか、1806年11月下旬から12月23日にかけてヴァイオリン協奏曲を作曲した。充実期の作品ではあるが、当時は手厳しく批判された。

「この作品には多くの美しさが認められるものの（中略）2、3の月並みな箇所の果てしない繰り返しのよって（聴き手は）くたびれてしまう」（『ウィーン演劇新聞』1807年次、27ページ。06年12月23日の協奏曲初演に対して）

19世紀はじめの協奏曲には2通りの類型があった。ひとつは独奏の気ままな演奏に、管弦楽が距離を保って寄り添うもの。もうひとつは華麗な独奏の妙技を存分に見せつけるもの。いずれのタイプでもソリストは、オーケストラから独立する方向性を持つ。ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲は、そのどちらにも属していない。作曲家は独奏楽器と管弦楽を緊密に組み合わせ、アンサンブル型の協奏曲を実現しようとした。当時の聴衆はそんな新機軸にとまどった。上記の厳しい評は、そういった聴き手の声を代表している。

第1楽章 ティンパニの4連打で始まる。交響曲第4番や第5番など同時期の作品でも作曲家は、ティンパニに光を当てている。この打楽器は通常、トランペットと共に用いられ、その低声部を受け持つ。第4・第5交響曲でもこの協奏曲でも、作曲家はそんなティンパニを“裸”で用いている。この新しい試みによって強調される単純な4連打の音型が以後、作品全体を束ねるかすがいとして働く。

第2楽章 主題と変奏。管弦楽と独奏とが役割を入れ替えながら進む。

第3楽章 協奏曲の定石通り、舞曲ジグ風のロンド。短長/長短のリズムで曲を前進させる。

最後に「カデンツァ」について。ベートーヴェンはこの曲にカデンツァを残していない。ただ、同作のピアノ協奏曲編曲版にはいくつかのカデンツァを書いている。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1806年11月下旬～12月23日／初演：1806年12月23日、アン・デア・ウィーン劇場／演奏時間：約42分
楽器編成／フルート、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

R. シュトラウス

交響詩〈ツアラトゥストラはかく語りき〉 作品30

フリードリヒ・ニーチェは1885年、思想書『ツアラトゥストラはかく語りき』を発表した。キリスト教の「神が死んだ」ことにより、頼みの綱をなくした世界に、ツアラトゥストラが「超人の思想」を説く。ツアラトゥストラとは、紀元前のイランで活躍した宗教指導者ザラスシュトラを指す。ザラスシュトラはゾロアスター教の開祖で、古代ギリシャ人にその存在が知られてからというもの、欧州では古代の偉大な預言者として有名だった。

この著作に触発され、リヒャルト・シュトラウス（1864～1949）は1896年、同じタイトルの交響詩を書き上げた。とはいえこの作品は、題材となる著作の内容を正確にトレースするというより、作曲家がそこから得た感興を音楽によって表現する、といった体裁をとっている。

ミュンヘン歌劇場の首席指揮者を務めていたこの時期に作曲家は、〈ツアラトゥストラはかく語りき〉の他、〈ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら〉（1894～95）、〈ドン・キホーテ〉（96～97）、〈英雄の生涯〉（97～98）を完成させた。ベートーヴェンの「傑作の森」に比すべき時代である。

シュトラウスは曲の9つの部分のうち、冒頭と掉尾を除く7つに、ニーチェの著作からとった言葉をタイトルとして付した。それぞれの部分はモチーフや楽想などの要素を共有しつつ展開する。それらの要素は第8部で次々と再現される。

第1部「導入」 オルガンの低音を土台に、トランペットが完全5度と完全4度を積み重ねた（ドソドの）音型を奏する。この音型は「自然」を表す。以後、第9部まで間断なく演奏される。

第2部「世界の背後を説く人々について」 第1部で八長調によって「自然」を表したのに対し、ここでは口長調の「憧れ」の上行モチーフによって「世界の背後を説く人々」を示し、両者を対置する。二つの調は理論上、遠隔関係にある。さらに聖歌「我信ず Credo」を、八長調からも口長調からも遠い変イ長調で引用して、キリスト教を暗示。以後「コラール（讚美歌）」風の楽想が耳を引く。オルガンと細かくパート割りされた弦楽器群に、少しずつ管楽器が加わっていく。

第3部「大いなる憧れについて」 聖歌〈マニフィカト〉をオルガンで示したのち、

第2部の「憧れ」のモチーフと「コラール」とを結びつけ、徐々に気分を高揚させていく。

第4部「喜びと情熱について」 滑らかにうねりながら推移する音型と、音程を大きく跳躍する音型とを組み合わせたモチーフで推進力を保つ。後半、減5度下行の「怠惰」のモチーフをトロンボーンが印象づける。

第5部「墓場の歌」 第4部と同じ素材で展開されるが、動的だった第4部に比べ静的な情緒が勝る。最低音部の音域が比較的高く、“腰高”な印象を受ける。

第6部「学問について」 「自然」のモチーフを下敷きに、オクターブ内の12の音をすべて使ったカノンが低音域に登場する。徐々に音域を上げていき、弾むような「舞踏」のモチーフによるリズムカルな場面に入る。

第7部「病の癒えつつある者」 第6部と共通の素材で、より活発なフーガを展開する。盛り上がり最高潮に達したところで、「自然」の音型が高らかに響き、総休止する。低音のうごめきを経て、高音楽器がせせら笑うように鳴り出したあと、各パートが合流。管楽器による鈴の音の模倣が続く。

第8部「舞踏の歌」 ワルツのリズムを下敷きに、これまでのさまざまなモチーフや楽想が回想され、全曲のクライマックスを築く。「自然」「コラール」「舞踏」「怠惰」などのモチーフが次々と登場する。

第9部「夜をさすらう者の歌」 深夜0時を告げる鐘が鳴る。クライマックスを迎えたはずの〈舞踏の歌〉が、この場面で徐々に“煮崩れて”いき、口長調にいたる。ゆったりとした部分で、これまでのいくつかの楽想を再現。口長調の和音に八長調の主音をぶつけて作品を閉じる。巷間の人々の倫理と超人思想とが相容れない存在であることを示すかのような、確信に満ちた終結である。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1895～96年／初演：1896年11月27日、フランクフルト・アム・マイン／演奏時間：約33分
楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、ピッコロ、オーボエ3、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン6、トランペット4、トロンボーン3、チューバ2、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、グロックンシュピール、鐘）、ハープ2、オルガン、弦五部

ニコライ

歌劇〈ウィンザーの陽気な女房たち〉序曲

シェイクスピアの喜劇のなかでも『ウィンザーの陽気な女房たち』ほど、オペラ作曲家たちに愛された作品もない。ドイツのオットー・ニコライ（1810～49）による同名作をはじめ、ヴェルディの〈ファルスタッフ〉、サリエリの〈ファルスタッフ〉、ヴォーン=ウィリアムズの〈恋するサー・ジョン〉などのオペラが書かれている。劇場での上演頻度が高いのはヴェルディだが、コンサートでよく耳にするのはニコライの歌劇〈ウィンザーの陽気な女房たち〉序曲だろう。

この序曲はウィーン・フィルのニューイヤー・コンサートでもよく演奏される。なにしろニコライはウィーン・フィル創設の立役者。卓越した指揮者でもあったニコライは1841年にウィーン宮廷歌劇場の楽長に就任すると、翌年にウィーン・フィルの前身であるフィルハーモニー・アカデミーを立ち上げた。

ニコライはベルリンで教育を受け、音楽家としてのキャリアをスタートさせた。その後「ドイツで学ぶことは大切だが、モーツァルトもそうしたようにイタリアで磨きをかけなければならない」と考え、ローマやボローニャで音楽家としての視野を広げた。イタリアでオペラ作曲家として成功を収めた後、ニコライはウィーン宮廷歌劇場で自作のオペラ〈聖堂の騎士〉を指揮する機会を得て、これをきっかけに楽長に就任する。そして、ドイツ語オペラの新作を求められ、歌劇〈ウィンザーの陽気な女房たち〉を書きあげる。しかし、ウィーンでの上演は実現せず、ニコライはベルリンへと移り、1849年に王立歌劇場で初演を実現させた。

序曲はおもに第3幕後半のウィンザーの森の場面に登場する音楽を組み合わせて構成される。冒頭の静謐な序奏は、夜の森に月が昇る場面から。おしゃべり風の主題があらわれた後、妖精をあらわす飛び跳ねるような主題が続く。やがて推進力を増し、陽気で祝祭的な楽想をくりひろげる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1846～49年／初演：1849年3月9日、ベルリン／演奏時間：約8分

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル）、弦五部

1/20

土曜マチネー

1/21

日曜マチネー

Program Notes

ウェーバー

クラリネット協奏曲 第2番 変ホ長調 作品 74

すぐれた協奏曲の誕生には当代一流の名手の存在が欠かせない。1811年、カール・マリア・フォン・ウェーバー（1786～1826）は、演奏旅行をきっかけにクラリネット奏者ハインリッヒ・ベールマンに出会う。ベールマンはミュンヘンの宮廷楽団で活躍しながら、ソリストとしても各地で称賛を受ける名奏者であった。

まず、ウェーバーはベールマンのためにクラリネット小協奏曲を作曲した。ミュンヘンでこの小協奏曲が初演された際、臨席したバイエルン王マクシミリアン1世はベールマンの妙技に感嘆し、ただちにウェーバーに2曲の協奏曲を作曲するように求めた。当時、ウェーバーもベールマンもともに20代。野心あふれる若者たちはこれに応えて、クラリネット協奏曲第1番および第2番が立て続けに書き上げられ、演奏も成功を収めた。ウェーバーはミュンヘンの宮廷楽団の他の楽員からも、新作協奏曲を書いてほしいと続々と依頼を受けたが、これに対してはファゴット協奏曲を書くにとどまっている。以後、ウェーバーの情熱はもっぱらオペラの分野に注がれることになった。このクラリネット協奏曲第2番にも、すでにオペラ作曲家としての顔が垣間見える。

第1楽章 アレグロ 管弦楽による勇壮な行進曲調の提示部の後、独奏クラリネットがフォルティッシモでいきなり3オクターブ下にジャンプして鮮烈に登場する。広い音域にわたって縦横無尽に動き回り、妙技を繰り出す。

第2楽章 ロマンツァ、アンダンテ 独奏クラリネットが愁いを帯びた旋律を奏でる。まるでオペラでヒロインが嘆く場面のような。終盤は「レチタティーヴォ」と記され、いっそうオペラ風に。

第3楽章 アラ・ポラッカ ポロネーズ風の朗らかなフィナーレ。喜劇的なムードのなかで、ソリストの華麗な技巧が披露される。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1811年／初演：1811年11月25日、ミュンヘン／演奏時間：約19分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏クラリネット

ベートーヴェン

交響曲 第6番 へ長調 作品 68 〈田園〉

もしもタイムトラベルが実現して、任意の過去の演奏会に立ち会うことができるとしたら？ まっさきに訪れたいのは1808年12月22日のアン・デア・ウィーン劇場だ。この日、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）は自らの指揮で交響曲第6番〈田園〉、同第5番〈運命〉、ピアノ協奏曲第4番、合唱幻想曲を公開初演した。これだけの歴史的傑作が一度に初演されたにもかかわらず、公演は「奇跡の一夜」どころか失敗に終わる。演奏が拙かったのか、作品が聴衆の理解を超えていたのか、会場が寒すぎたのか（という説がある）、はたして。

交響曲第6番〈田園〉の初演の際に用いられた楽譜には「田園交響曲、あるいは田舎の生活の思い出。絵画というよりも感情の表出」と記されていた。当時、自然を題材とした交響曲は決して珍しくなかったが、自然の描写を豊かな感情表現へと昇華させたところにベートーヴェンの真骨頂がある。

第1楽章「田舎に着いたときの愉快な気分」アレグロ・マ・ノン・トロポ くつろいだ表情の穏やかな主題が風光明媚な田園風景を想起させる。

第2楽章「小川のほとり」アンダンテ・モルト・モート しなやかで流麗な旋律はさらさらと流れる小川のような。終盤にフルートがナイチンゲール、オーボエがウズラ、クラリネットがカッコウの鳴き声を模倣する。

第3楽章「田舎の人たちの楽しい集い」アレグロ 陽気なスケルツォ。中間部は農民風のダンス。第3楽章から第5楽章までは切れ目なく続く。

第4楽章「雷と嵐」アレグロ 不吉な遠雷が低弦でほのめかされる。ピッコロ、ティンパニ、トロンボーンが加わり、猛烈な嵐がやってくる。

第5楽章「牧歌、嵐の後の喜びと感謝」アレグレット 嵐が去り、しみじみとした感謝の気持ちがあがる。陶然とした喜びの牧歌が奏でられる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1807～08年／初演：1808年12月22日、ウィーン／演奏時間：約39分

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、ティンパニ、弦五部

1/20

土曜マチネー

1/21

日曜マチネー

Program Notes